

私は現在言語文化をどのように捉えるか

—— 「言語文化論」のクラスを通して見えてきたこと

千田 昭予

はじめに

本稿は、今年(2001年)春学期に早稲田大学大学院日本語教育研究科で、細川英雄先生の担当講義「言語文化論」への参加を通して考えたことをまとめたものである。講義では、言葉と文化の様々な側面を言語習得との関係で捉えた考察がなされた。

また、講義が始まって間もない5月に書いた、言語文化について考察したレポートと、講義を終えた時点での考えを比較する視点でも述べられている。

1 言葉について

1 - 1 言葉は何のためにあるか

言語文化を考えるにあたり、この講義のはじめに書いたレポートでは、「言葉」に関する考察がされていなかった。とりわけ、言葉が何のためにあるのか、他者とのコミュニケーションが何のためにあるのかについては講義を通じて新しい視点を得た。その結果、現在は、言葉の存在意義と思考の言語化の過程を次のように捉えている。

言葉には、「内言」と呼ばれる個人の内部にあるものと、その「内言」が他者に向かって発せられた「外言」との二つの形が存在する。前者は個人の考えをまず自己にとって明確なものにするために必要なものであり、後者は他者とのコミュニケーションのために必要である。時として、日記などの形態をとって、言葉が自己に向かって発せられる場合も考えられるが、その場合も、自己を相対化した「他者」的なものに向かって言葉が発せられていると考える。

1 - 2 コミュニケーションは何のためにあるか

内言を外言化したコミュニケーションを通じて、人は自分の考えを言語の形にして他者に投げかけ、他者の考えを言語の形にして受け止める。その行き来（往還）を通して自らを表現し、他者を理解する。コミュニケーション活動においては、誤解が生じたり、共感を得られない事態が発生したりもするが、相手とのコミュニケーションを断念しない限り、自己を理解してもらうため、あるいは他者を理解するために、人はコミュニケーションを試みる。この過程で、自己の内言は、相手を含めた「場面」を考慮にいれたものに変容するはずで、それが相手に理解されればコミュニケーションは成立する。コミュニケーションが成立した時の自己を受け入れられたという満足感と、相手から刺激を受けた満足感こそがコミュニケーションの意義であるといえる。

こうしたコミュニケーション活動を通じて自己の内言を外言化することで、個人の内言が鍛えられ、外言もまた内言の充実によって内容的に豊かなものになる。こうした言葉の充実をもたらす作用も、個人の言語能力の向上という視点からみたコミュニケーションの意義の一つであると考えられる。

2 文化について

2 - 1 私の、文化の捉え方

文化の捉え方には様々なものがある。しかし、たとえば伝統的な作品や文化遺産に代表される「物質文化」のようなものについては、個人の言語能力に及ぼす直接的な影響は少ないと考える。したがって私は、様々な文化の捉え方のうち、ある社会に存在する習慣・行動様式・思考方法について考えてきた。

人間は、生涯を通して、家庭、学校、地域、職場、と様々な大きさの単位の社会に属し、その社会における習慣や行動様式を習得しながら、その社会における「構成員らしさ」を身につけていく。

ここでいう「構成員らしさ」とは、社会の側からみればその社会の構成員として機能する性質のことであり、個人の側から見ればその社会に属していることに居心地の悪さを感じないような、ふるまいかたである。「構成員らしさ」を身につけることは、個人があるひとつの価値観を強制されるということではない。個人がそれぞれの社会で遭遇するひとつひとつの場面の認識力を育てていく過程といえると思う。それは他者とのコミュニケーションにおいて相手をよりよく知ろうとして自己の言葉を練り上げる過程に似ている。そして、これまたコミュニケーションにおけるのと同様、場面をよりよく認識することで自己表現もしやすくなり、自分がその社会で受け入れられていくことにもつながるのである。

この過程は、新しい習慣・行動様式を身につけていくという意味で文化獲得の過程である。こうして、人間はいくつかの社会の文化を重層的に獲得して成長・変容していくものと考え。再びコミュニケーションとの関連でいうと、他者の理解は他者の背負っている文化をも含めての理解であるといえる。

2 - 2 文化と文化論

ただし、ここでの留意点は、「文化」と「文化論」とを区別して考えることである。一般に「文化」と呼ばれているものが、実は厳密には「文化論」と呼ぶべきものが多くあるということは、この講義の中でも大変興味深いトピックの一つであり、度々議論された。つまり、それぞれの社会の「文化」がどういうものであるのかを明らかにしようとして取り出したとたんそれはステレオタイプな「文化論」になってしまうということである。たとえば、「日本人は礼儀正しい」「日本人は裏表がある人たちだ。」といった

ように、われわれの周りには文化論的な情報が満ちている。集団の社会に存在する文化を考えることは、その社会に属する人々の考えやふるまいを総括して行われるため、こうなることは逃れられないことであると思われる。

しかし、個人個人が背負っている文化とは、こうした「文化論」にある内容とは明らかに異なる。とするならば、われわれが明らかにしようと試みる対象である「文化」は、一人一人の個人の中に内在する「個の文化」でしかないという結論になる。また、そうした文化の発見は、「文化論」のように、ある法則性に帰納させてしまうことで得るものではなく、むしろ個人の事象に対する徹底した認識によって得られるものであり、そうした認識そのものが「文化」と呼びうるものと言えると考ええる。私たちの周囲に溢れかえっている文化論から脱却して、自らの文化は、徹底して考え、言語化する過程で明らかにされることになるだろう。

2 - 3 文化論は悪か？

ここで現在行われている言語教育における文化の扱いを考えてみたい。外国語を学習する動機は、実はそれほど明確なものでない場合がある。つまり生活に必要不可欠なものだから学ぶのではない場合があるということである。とりわけ、その言葉が母語として話されていない社会で外国語を学ぶ場合（例：アメリカで日本語を学ぶ、など）においてはとりわけそういう傾向が強いと思われる。私がアメリカで日本語を教えていた時の対象の学生は、専攻しようとする分野（例：地域研究）で語学が必修である者がほとんどであったし、クラスが始まる前に実施したアンケート調査では、学習者の動機として多かったのは、興味本位であったり、いつかビジネスなどに生かされれば、というものが多かった。そして特に多かったのが「日本の文化を知りたい」というものであった。こうした学習者は、外国語を学ぶのと同時にその国についての情報や知識をほしがるものなのである。国についての情報や知識は確かに文化ではなく文化論なのであるが、果たしてそれを教えることは言語教育にとって全く意味がないのだろうか。

私は、そうした情報や知識を学習者の言語学習に生かすも殺すも教師次第だと考えている。言語文化研究の講義の中で、おじぎの仕方を、その角度に至るまで、日本語の授業の中で紹介するという例が話題になったことがあった。こうしたものを知識として伝授するようなことは、確かに、ステレオタイプな文化論の教条化の例であると感じた。しかしながら、おじぎの仕方を情報として示すとしても、そこに「実際はいろいろな人がいま

す。」などと付け加えて教師の個人としての認識を明確に示すだけで、ステレオタイプの押し付けにはならないと思う。非母語社会における外国語教育で、文化論としての情報や知識をことごとく避けて言葉だけを教えることは、却って味気ないものになるように思われる。ただし、その文化論としての情報や知識の選定や示し方は、ステレオタイプな考え方の押し付けにならないように、また学習者にとって「他者」との出会いを感じさせるようなものになるよう教師によって充分配慮されなければならないと考える。また、こうした知識や情報を与えるだけで終わらず、それらの提示によって議論が深まるようなものにする必要もあるだろう。このように配慮された「文化論」の情報や知識との出会いによって、学習者の興味や関心が高まり、自己の問題意識が掘り起こされるようになれば、学習者の「個の文化」の発見にもつながりうると考える。ただし、くどいようだが「文化」と「文化論」とは異なるという認識は、もっていなければならぬことである。

3 言語文化獲得について

3 - 1 言語文化とは何か

文化が、一人一人の内側にあるものであり、何かを見て解釈し、自分にとっての意味を発見する「認識」そのものであるとするならば、その「認識」を表現することが言語活動であるのだから、言語と文化は不可分の関係にあると言える。

ところが、従来の言語教育では、この二つが別々に教えられてきた。より厳密に言うならば、文化が教えられてきたのではなく、文化論が前述の配慮なしの情報として教えられてきたのだ。そのため、文化を教えることが生き生きとした言語活動を促すことになりえていなかった。

学習者自らが、その対象言語に内在するコードとしての文化を発見して、自らの言葉で語る真のコミュニケーションを実現するためには、文化論を知識として教え込むのではなく、言語教育を通して文化を発見させる、あるいは文化の発見を促しながら個々の言語能力を鍛えていくことが必要である。

「言語文化」という述語が表すところは、まさに、こうした、言語を通

して発見される文化、文化の発見を通して鍛えられる言語、であると考え
る。

3 - 2 ある学習者の例

私が考える「言語文化」の述語の意味をより明らかにするためにも、こ
こで、言語文化の獲得能力に長じていたと考えられる学習者（日本人、日
本語母語話者）の例を紹介したい。彼女（Ｙとする）は、父親の転勤に帯
同して中学３年の夏にアメリカに住むようになった。私は、現地の日本語
補習校（注：土曜日だけ開校される現地邦人子弟のための学校のことで、
国語と数学が教えられる。国語はいうまでもなく母語の維持のため、数学
は言語に関わらない普遍的な科目であるため、邦人生徒たちが現地校で「誇
り」を保てるように、という「配慮」で教えられている。生徒たちは月曜
日から金曜日までは現地の学校に通っている）の国語クラスで彼女と４年
間接した。Ｙは補習校に入ってきた日にクラスの学生全員にカードを配り、
そこに級友の自己紹介を書いてくれるように頼むような、いわゆる外交的
な生徒であった。そうした性向は現地校でも変わらず、次々と友達を作り、
他の日本人生徒からうらやましがられることしきりであった。アメリカ人
の友人を自宅に招いたり、ボーイフレンドと出かけたり、クラブ活動に複
数かけもちで参加したり、ということは、現地校に慣れるだけで精一杯の
他の日本人生徒から見れば驚異的であったことだろう。補習校ではよく渡
米当時の苦労話が話題になるのであったが、そういう時、Ｙは、英語が話
せないというだけで二流の人格として扱われることが耐え難かったと言っ
ている。そしてなんとか相手に自分を認めさせようとして、自分がきちん
と物事のわかっている対等な人間であることを、手を変え品を変え訴えた
のだという。そのＹが、同じ文脈で「アメリカにいるからといってなにも
特別なことはしていない。日本にいるのと同じことをしているだけだ。」と
も言っている。新しい環境に適應するために自己を変えようと格闘してき
た者が、人間はどこに住んでも同じであるという結論を導き出したことは、
あるいは逆説的にも感じるが、これこそ言語の習得を通じて個の文化を（お
そらく彼女は無意識のうちにではあるが）発見し、個の文化を発見する過
程で言語を鍛えあげた者ゆえの感慨であると思う。

3 - 3 言葉文化獲得の意義

私は５月に書いたレポートで、第二言語学習における言語文化獲得の意

義について「これまでの私の体験から、第二言語文化獲得は、異文化にあってもいきいきと自分を発揮できるようにすることにつながるものであると確信している。」(注:「文化」についての認識は当時と異なっているので、異文化というところを「異なる環境」としたほうが現在の私の考えに合致する)と述べた。これを書いた時には、Yの現地への適応の過程が脳裏に浮かんでいたのであった。「いきいきと自分を発揮する」ことはすなわち自分の言葉で自分の文化を表現することであり、それが成功した時に自己実現をしたという満足感が得られるのだ。これは先述の、コミュニケーションの意義とも通じる。三か月間の講義を通じて、私はますます上記の確信を深めるとともに言語と文化との不可分性についても再認識した。

4 言語文化の捉え方と言語教育

4 - 1 総合活動型日本語教育

それでは、上記のような言語文化の捉え方が、どのように言語教育に生かされうるのだろうか。前述のような言語文化獲得能力の高い学習者や、生活上の第一義の必要に迫られて日本語を否応無しに習得していく、たとえば外国人力士のような人たちには、教室という場や語学教師が果たす役割は少ないと思われる。しかし、多くの学習者にとっては、個人の言語活動を活性化できるような他者とのコミュニケーションの場、言語文化育成のための場、つまり教室活動を提供されることが必要である。

教室活動を通じて「言語文化」獲得を目指すの実践例として、講義の中では早稲田大学の総合活動型日本語教育のクラスの様子をビデオで見ることができたが、その授業では、教師が教室内のコミュニケーション活動を通じて学習者に個人の言語活動を活性化する場を与えていることがよくわかった。

こうした形態の授業では教師が知識を一方的に伝授することをせず、話し合いの場の司会者とでもいった役割を負っている。これは一見学習者に任せて教師はなにもしないようにもとられかねないしが、教室内のコミュニケーションを活発にするための発問や雰囲気作りは、テクニックとしてだけではなく教師の教育観も含めた力量が必要とされたと感じた。また、ビデオでは見られなかったが、この授業では、学習者に問題を発見さ

せ、それをレポートにまとめさせるという課題をあたえているため、問題発見のためのヒントとなる視点をどうやって提示するかという難しさもあると考えられる。

4 - 2 国語教育と日本語教育との新しい関係性

非日本語母語話者の、言語文化獲得能力の育成を助けることは、あるいは外国語教育の役割ではないかもしれない。しかし、個人の文化を内包しない言語は存在せず、言語を身につけることが言語文化を身につけることである以上、宿命的に言語を教えることは言語文化獲得能力を身につけさせることになる。

ところで、このような教育は、母語話者に対しては、実は従来から母語教育（日本の国語教育）の分野で、あるいは、就学前の子どもに対しては家庭教育で、行われてきたことではないだろうか。日本の国語教育には様々な批判もあり、日本語教育は、国語教育や日本の学校での英語教育の反省の上に成り立っている部分があると思われるが、母語教育で行われていることに近づくことで従来型の日本語教育では解決できなかった問題が追求される可能性もあるのではないだろうか。

日本の母語教育（国語教育）は、社会に有用な人間の育成を教育目標として掲げており、言語教育にとどまらない人間教育的な側面も併せもっている。こうした「社会のための教育」という方針には教師側からも学習者側からも当然反発はあるのだが、人間性なくしての表現、言語活動はありえないことも事実である。言語学習を個人の言語活動を通して自己実現を図る訓練の場としてとらえ、表現活動を行うことは、ある程度の文法体系を身につけた学習者には有効であると考ええる。

また、逆に日本語教育が母語教育に与える影響もある。日本語を徹底的に相対化することが、学習者の主体的な問題発見を促すことになるのではないだろうか。たとえば、学校文法を学ぶ目的の不明確さは、しばしば指摘されるところであるが、自分の使っている言葉に意識的になり言葉の体系をつかむことは、それが自発的に行われるのであれば、大変意義深いことだと考える。

実際、細川先生の留学生向けの「日本事情」のクラスが日本人学生には「異文化研究」として開講されていることや、総合クラスで実践されていることは、こうした外国語教育と母語教育との新しい関係性を模索する試みとして興味深い。

終わりに ― 新しい知の枠組みを得て

本論では、日本語教育に関わる者の立場から見た言語文化の捉え方が、三か月間の言語文化研究の講義を通してどのように変化したのかを、述べてきた。さらに、そのような変化を通じて得た捉え方が今後日本語教育にどのように生かされていくべきかを考察してみた。

この講義は、自らの経験を俎上にのせ、猛反省を促すことになり、時につらいものであった。教育の方法論に拘泥するよりも、それに先立つ教育観の確立の必要性を痛感した。日本語教育は、効率性を追求するあまり知識の注入に終始してしまう危険をはらんでいる。その原因としては、ある教育機関や学習者の事情から生まれる時間的制約もあるが、日本語教育理論が、構造主義的な自然科学に近い形で発達することをよしとされてきたため、日本語の授業もすっきりと客観的で分析的な形を求められるようになったからではないだろうか。その結果、教えるべきこと（このことは何も文法知識に限らない。広く伝達能力に必要な文化論的な知識一般も含まれる）を順序立てて教えてしまえばそれで教師の役目は果たし終えたと思いきなってしまうのである。しかし、本当に大事なものは、学習者が知識の習得と並行して自らの言語文化能力を鍛えあげていく手助けをすることであると考えている。この講義を通して得た新しい知の枠組みを基に強固な教育観を作り上げていきたい。

参考文献

- 細川 英雄 『日本語教育と日本事情 異文化を超える』1999 明石書店
細川 英雄 「新しい個の表現をめざして 早稲田大学日本語研究教育センター「日本語・総合」の実践と試み」2000 講座日本語教育 vol.